

カイロウドウケツ (偕老同穴)



←上から見たところ

ドウケツエビ

精巧なガラス細工？ 欧米では「Venus's flower basket(ビーナスの花かご)」と呼ばれ、装飾品としても珍重されている。この物体の正体は、水深100mの海底に生息する**海綿動物**の骨片(骨格)である。骨片は**ガラス繊維**でできており、強くて折れにくいばかりでなく、通信用の光ケーブルとして使えるくらい高品質の光学的特性を持っている。繊細さと精巧さ、高性能を兼ね備えた「ビーナスの花かご」。これ以上ないくらいの美しいネーミングではないか。ところで、日本では、**カイロウドウケツ**(漢字で書くと、偕老同穴)という漢文調でおどろおどろしい名前が付けられている。

偕老同穴。「夫婦睦まじく、生きては偕(とも)に老い、死んでは同じ墓(穴)に葬られる」という意味で、結婚披露宴で「偕老同穴の契り」と祝辞に使われたり、このカイロウドウケツそのものが結納の一品に加えられることもあったそうだ。しかし、このカイメンが夫婦愛の象徴なのではない。実は、このガラスのかごの中には、**一対のエビ**が棲んでいるのである。名前を**ドウケツエビ**といい、オスメスつがいで一生涯をこのカイメンの中で過ごすのである。幼生の頃、カイメンのガラス繊維のメッシュの中に入り込んで住みつき、やがて成長すると、もう出られなくなってしまうのである。まさに偕老同穴なのである。上の丸枠の写真がドウケツエビ(の一匹)である(名古屋港水族館のHPより)。

はたして、このつがいのエビは幸せなのだろうか？ 調べてみると、かごの中は、カイメンが取り込んだプランクトンなどのエサが豊富で、外敵からも襲われることはないなど、メリットがたくさんあるそうだ。一方、カイメンの方には、ドウケツエビが暮らすことで何のメリットもない。生物学的には「**片利共生**」ということになる。ドウケツエビたちにとっては、願ってもない「ついの住処(すみか)」なのであろう。

なお、カイロウドウケツの本物は校長先生が正面玄関に展示中。中にエビはいるかな？



カイロウドウケツの仲間

(海水中で生きているカイロウドウケツ：名古屋港水族館HPより↑)